
空白の歴史

あすた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白の歴史

【Nコード】

N8036X

【作者名】

あすた

【あらすじ】

人質として異国の都で暮らす亡国の王子の物語。庇護者であった王が身罷り、新王が登極したことで、王子の運命が大きく動き出す。果たして、王子の行く末と婚約者とした姫との恋の行方、そして、祖国の命運は……。

魔法もなければ、天使も悪魔もでてきません。純粋な人の営み、歴史を恐れもなく書いてみようと思っています。

星明かり（前書き）

歴史とは悲劇だと前提にした作品です。

星明かり

ここに年表があるとして、それはただ事実のみを淡々と語ることしかない。事実の裏に潜む彼らの心情も、葛藤も、そして、躊躇いも、決して語ることではない。その語られることのない「空白の歴史」を、ほんの少しだけ語っていいと思う。時は西海暦三五六年五月一二日、所はマルニアーム王国王都ディエンテの夜、この物語の主人公であるカリファスの一六歳の誕生日から始まる。

その日、カリファスは自らの誕生日を祝う宴の席を無断で抜け出すと、もれ出てくる部屋の明かりに背を向けて、張り出された露台から数多の星がきらめく夜空を見上げた。露台の隅で風に炎を揺らす蠟燭のほのかな明かりに浮かび上がるその姿は、優艶と呼んでも決して過言ではあるまい。澄んだ青い瞳に宿るのは深い憂愁であったが、美を愛でる神々の寵愛を一身に受けたであろう美貌は、男であることが惜しまれるほどであった。長身で華奢な体軀は触れれば折れてしまうのではないか、と思えるほどである。その彼の周囲を風が吹き抜けて、闇の一部を切り取ったかのような長い髪を愛撫していく。背中を覆うほど伸びた髪は、七年前のあの日から一度として切ることなく伸ばし続けたものだ。彼の秘めた想いを、もしかしたら、この髪だけが知っているのかもしれない。

彼が見上げる視線の先で、星は無数に瞬ききらめいて幻想の世界を作り上げていた。見上げた視線を地上に転ずれば、常夜灯の篝火が何か生あるもののように燃え盛っては飛び込んでくる羽虫を呑み込んでいく。その炎はカリファスに過ぎた日のことを思い出させるに充分だった。今では滅びたストイナ王国の王の子として生まれた彼は、国が滅亡した後も不穏な動向を示すストイナの民を牽制するため、人質として異国の都での生活を強いられていた。

国が滅びたあの日のことは、カリファスの脳裏に今もなお鮮明に刻まれている。

「わたしは、母上と運命を共にする覚悟を決めました」

虜囚の身となって勝者の慰み者になるよりか、ストイナ王家の女として気高くその生を終える。「死」というものに至高の価値を見出した母と姉を、わずか九歳でしかなかった少年に理解することはできなかっただろう。続いた姉の言葉も、この時の彼には何のことかわからなかったはずである。

「ですが、あなたは生きなければなりません。生きて、生き抜いて、そして、血を残しなさい。そうすることで、その血の続く限りストイナ王家もまた、永遠に続いていくことができるのですから」

四つ年上の姉は、弟の肩に手を置いてそう言った。姉の果敢無い微笑に対して、弟はうなずくよりほかに応える術を知らなかった。その姉の去り行く後ろ姿を忘れることはないだろう、笑顔のよく似合った優しくも美しかった姉の最期の姿を。

それは、わずか七年前のできごとにすぎない。あれから月日は流れ、少年は青年へと変貌を遂げようとしている。留まることを許さない時間の流れは、そのままカリファスがマルニーム王国の王都ディエンテで暮らした時間でもあった。

その王都ディエンテは、陸上貿易の中継地として発展してきた街でもある。四方を天然の要害に囲まれた狹隘な盆地にあって、山肌を削って階段状の街並みを築いている。そこに住まう者は、盆地のほぼ中央に位置する王宮を見下ろすことになるのだが、それを不敬だと言って咎めた王は、幸いにも長い歴史の中で唯のひとりとして存在しない。

それでも、王宮内にある「太陽の塔」より高い建築物は禁止されている。この「太陽の塔」にはもうひとつ「虜囚の塔」という別名があって、あの塔は天道を指して太陽の道標となっている、とある王の治世にある貴族が言った。それが由来となって「太陽の塔」と呼ばれるようになった。また、別の王の御代において、あの塔に部

屋を戴くのが自分の願いだ、と願い出た貴族があった。その貴族の存在と世辞を嫌った王は、その願いを叶えてやろう、と言ってその貴族を生涯塔の一室から出さなかった。その故事から「虜囚の塔」という名が付いた。

しかし、どのような名で呼ばれようとも、夕暮れ時、その塔の頂上から見渡す景色は絶景と呼ぶにふさわしい。はるか遠くの稜線は太陽の余光を受けて影絵のように浮かび上がり、階段状の街並みは朱に染まって空気さえも色付いて見えるほどである。

その塔の屋根の尖端が、露台に立って再び星を見上げるカリファスの視界の片隅に映る。天に向かって真っすぐ伸びるそれは、空を切り裂く槍の穂先のように見えて、カリファスはあまり好きになれなかった。

「カリファスどの、今宵の主役であるあなたが、このような所で何をしているのだ？」

背後からする声にカリファスは、決して誰にも真似できないであろう優雅さで振り返ると声の主を確認した。

マルニアーム王国国王エドワルには三人の子があつて、カリファスに声をかけたのは、その二番目に当たるアリマールだった。愛嬌さえ感じられる容貌に、茶色の瞳に穏やかな微笑を宿したアリマールがゆっくりとした歩調でカリファスに近付いてくる。艶やかな衣装を身にまとったアリマールに対して、カリファスは裾に誰かの手による刺繍のなされた白の上下を身に付けている。その差が、勝者と敗者を分かつ境界線であるのかもしれない。

「主役が欠けては、何のための祝宴かわからなくなるではないか」「申し訳ありません、アリマール殿下」

努めて微笑を作ろうとカリファスは思うのだが、その瞳まで笑ってはいない。それでも、発せられた声音は一流の奏者が奏でる琴の音のようで、聞く者の耳に心地よく流れていく。

「星があまりに美しくあったため、つい見入ってしまいました」

そういったカリファスに並んだアリマールは、露台の手すりに背中をあずけると天空を見上げて、なるほど、とつぶやいた。そして、右手を高く伸ばすと、何かをつかみ取るような仕種を試みせる。

「どうやら、わたしの手は星をつかめるほど長くはないようだ」

陽気な口調でそういつて、アリマールはカリファスに微笑を向けた。風に揺れる鮮やかな金髪は、この夜の天空にはない月でも映したかのようなだった。肩にかかる程度に伸ばしたその黄金の髪に、真珠の髪飾りが嫌味なく添えられていた。カリファスと同じくらいの長身ではあったが、カリファスほど華奢ではなく、並んで立つ姿にも何らの遜色はない。

「殿下は、星をつかみたい、と望まれるのですか？」

星空を見上げて、カリファスが問いかける。その問いに、アリマールもまた夜空を見上げて答える。

「いや、わたしは手に入らぬ物をほしいとは思わぬ。もっとも、兄上は星の軌道さえもご自身の物にしたいらしいが……」

アリマールの兄、サリハールの憎悪と嫌悪の宿った薄い茶の瞳が、カリファスの脳裏を一瞬だけよぎっていった。

「……星が美しく見えるのは、決して手には入らぬ物だ、と知っているからだ」

その通りであるものかもしれない、アリマールの言葉にカリファスはうなずいた。手に入れてしまった瞬間、急に色あせてみえることもあるが、手に入れても色あせることのない「もの」を、カリファスは護りたい、と願っていた。

静かに瞬く星の群れを、両者はしばらく無言で見上げていた。こうしていることが、カリファスには不思議でならない。アリマールはマルニアーム王国の王エドワルを父とする、カリファスにとって祖国と両親、そして、姉の仇の子であるのだ。人質という立場のカ

リファスとは、本来は相容れない仲であるはずが、同じ場所に立ち、同じ空気を吸い、同じように星空を見上げている。これだけでも充分であるというのに、カリファスにはもうひとつ信じられないことがあった。

「アリマール兄さままで一緒になって、何をなさっていらっしゃいますの？」

アリマールを「兄」と呼んだ少女期特有の甲高い声音は、エドワルの末娘であるラリアンヌのものであった。カリファスにとって、彼女は「奇蹟」に近い存在でもある。淡い桃色の衣裳を身にまとった彼女が、屋内と露台を結ぶ戸口から恥じらうようにしてこちらを見つめている。

今年一三歳を迎えるラリアンヌの幼さを充分に残した容貌は、露を含んで朝陽に微笑む薔薇の蕾つぼみのようであり、後数年もすれば大輪の薔薇のような美しい女性になるだろう、と誰もが期待していた。青い瞳はよく晴れた空のようであり、長く伸ばした黄金の髪は水面みなもに映る太陽の輝きにも似ていた。長い髪が風に揺れると、そこに黄金の波紋が夜の闇の中に見えるようだった。

「カリファスさまを呼びにいかれたまま、お兄さままでお戻りにならないものだから、何事かあったのではないか、とお父さまとお母さまも心配しておりますわ」

その言葉が示すように、この夜、カリファスの誕生日を祝ってくれるは、この兄妹とその両親である。カリファスに対して明らかにそれとわかる敵意と憎悪を向ける、アリマールとラリアンヌの兄サリハールは、父王の言い付けに背いて欠席している。

そして、兄弟妹の両親とは、マルニアーム王国の国王エドワルと、その後シスタリアのことで、滅びた国の王の子の成人を、滅ぼした国の王が祝っていることになる。この一事だけからでも明白のように、カリファスはエドワルから賓客として優遇されている。ラリアンヌを許婚者としたのも、その一環であるのだとしても、裏には別の事情があって、ストイナの滅びた国の民が激発することのない

ように、とする政治的な配慮でもあった。

しかし、周囲の思惑はともかくとして、婚約した両者はまんざらでもないようである。

「星を見ていたのだ、ララ」

兄は妹を、ララ、と呼んで手招きした。妹は兄の誘いには乗らずに庇の下から空を見上げるにとどめた。だが、どうやら妹は兄ほどの感慨を受けるにはいたらなかったようである。

「星は逃げたりなどしませんわ。明日の夜も、きっと今夜と同じように姿を見せてくれますわ」

そこで一度言葉を切ったラリアンヌは、カリファスに対して思慕の眼差しを向けると続けた。

「ですけど、カリファスさまの一六歳の誕生日は、今日だけしかありませんわ」

「もつともだ。カリファスどの、これ以上国王陛下と王后陛下を、お待ちせしては非礼にあたるだろう」

そういつて、アリマールはおどけて見せたが、カリファスは眉ひとつ動かさなかった。その様子に、アリマールは内心で溜息をもらす。自分には想像さえ付かない悲哀が、カリファスという一個人の人格を形成したに違いない。最初は同情から仲良くなろうと思ったのだが、少しずつ付き合いを深める内に三つ年上の実兄サリハールよりも、ひとつだけ年上のカリファスにより強い親近感を覚えるようになって現在にいたっている。

それに対して、ラリアンヌは少しだけ事情が異なる。彼女にとって、五つも年上の兄サリハールは刺々しく感じられて恐ろしくさえあった。そうなると、自然とすぐ上の兄アリマールを慕い、兄に誘われるままにカリファスとも友好を深めた。もともと異国の少年でもあったカリファスには純粋な興味があったため、ラリアンヌはすぐに好意を示した。その好意が尊敬に変わり、思慕へと移るのに要した時間はそれほど長くはない。

だから、カリファスとの婚約が決まった時、ラリアンヌは何よ

りもうれしかった。これで、誰に遠慮することなくカリファスと語らうことができるのだ。あまり多くを語ることはないが、ララリアンヌの言葉にうなずき微笑んでくれる、それだけで彼女は幸福でいられた。カリファスの瞳の奥に宿る悲哀が、いつか微笑に変わる日がくれば、二人で幸福な時間を築いて行けるに違いない、とララリアンヌは信じている。

「さあ、カリファスさま、お部屋に戻りましょう」

そのララリアンヌの言葉に賛同したアリマールが、カリファスの背中を押す。なされるままに歩を進めながらカリファスは、今この瞬間を幸福に思う自分を意識した。畏怖と恐怖、不安と緊張、それらを一緒に馬車に乗せて国境を越え、異国の都の城門をくぐった。一緒に持ち込んだはずの感情は、いつの間にか霧散してしまっていた。ララリアンヌの無邪気な微笑みと、アリマールの陽気な笑い声が、カリファスを自由にくれた。ここに来なければ、得ることのなかった幸福である。

しかし、それは本来得るべきはずであった幸福の代償でしかないことを、カリファスは同時に知っていた。わずかな罪悪感を覚えなくもないが、それでも、不幸でいるよりも幸福でありたい、と望むことは罪ではないはずである。

カリファスの前には、温かく幸福な空間が待っていてくれた。少なくとも、この時までには。

胎動

あるいは、幸福な時間というものは、長くは続かないものであるのかもしれない。形あるものがいつかはその形を滅ぼすように、生ある物がいつかはその生を終えるように、幸福な時間は刹那の瞬きにも似ているように思える。そして、幸福な時間が優しく甘美なものであればあるほど、終焉は残酷であろうとするのだろうか。

果たして、その終焉の訪れが告げられたのはいつであったか。夢の残滓にまどろんでいた時は、まだ幸福の延長線上にいたはずだ。だが、山も登れば下るしかないように、太陽も中天をすぎれば西の彼方の稜線に没していくしかないように、カリファスの偽りの幸福も、また確実に消え去ろうとしていた。

西海暦三五六年六月一日、その日の日没を待たずして、マルニアーム王国の国王エドワルが崩御した。一ヶ月ほど前から体調を崩して寝込みがちではあったが、まだ四〇を半ばすぎたばかりの早すぎる死であった。誰もがその死に対して、悼み悲しみ、そして、涙を流した。それは、カリファスとて同様だった。祖国と両親と姉の仇を討つ機会を永遠に失くしたのだ、と知りつつも、それ以上の何かが深い悲しみとなって押し寄せてくるのだった。

「勝手に死なれてしまって、これからどうすればよろしいのでしょうか」

露台に通じる大きな窓に背中を向けた男は、憤慨してそう言った。それに対して、カリファスは部屋の中央にある長椅子の肘掛けに身体をあずけたままの姿勢で曖昧にうなずいただけで、発言者の顔を見ようとはしなかった。

「われらの憎しみは、どこに向ければよろしいのでしょうか」
ストイナ王国で將軍の家に生まれ、近侍としてカリファスと共に

成長したハドウェルが、苛立ちを吐き出すように声を荒げた。先のストイナ戦役において、ハドウェルもまた両親と兄を亡くしている。異国の都へ移送されるカリファスに、ただひとり同行することが許されて、主同様にマルニアーム王国の王宮に暮らしている。茶の混じった赤い髪は短くそろえられ、黒曜石のような黒い瞳には絶えず激情が宿っていた。その瞳と彫の深い容貌が見せる精悍な表情は、カリファスと同年とは思えぬ妙に大人びた印象をあたえた。背丈はそれほど高い方ではないが、肉付きのよい体格は頼りがいがあるように思える。

それ以前がそうであったように、マルニアーム王国王都ディエンテに移り住んだ後も、ハドウェルはカリファスのために懸命になつてくれた。時には励まし、時には慰め、常に傍らに寄り添ってくれた。だからといって、ハドウェルがカリファスのすべてを知っているわけではない。

カリファスが仇の子であるアリマールと親交を深めるのも、ラリアンヌを婚約者としたのも、そうやってすべてを許容し甘受するのは生き抜くための虚構である、とハドウェルは信じている。そんな彼に向けて本心を明かすことは、カリファスにはできなかった。

王宮の内にも外にも飾らない本心を語ることでできる相手を、カリファスは持ち合わせなかった。少なくとも、カリファスを囲む者たちが、彼に対して心を閉ざしているからではないだろう。カリファス自身が心を閉ざしているからなのだとして、誰に向けて心を開けばいいのだろうか。自身の発する言葉が周囲にあたえる影響を思えば、簡単に本音を吐露するわけにはいかない。人にはそれぞれに似合った、立場があるのだ。

そして、何の前触れもなく、乱暴に自身の手で扉を開けて現れた男の、カリファスに対する立場はというと、一方的な悪意を寄せてくる敵対者であっただろうか。その男の名を、サリハールといった。

いくら優遇されている、とはいっても、その部屋はそれほど広くはない。窓は南側にあって、そこからは「太陽の塔」もしくは「虜囚の塔」を見ることができるが、殺風景な部屋には絵の一枚もなく、三面を囲う壁は白いままであった。壁からしてそうであるから、床に敷物の類はない。

また、天井から吊るした照明には、本来の半分の蠟燭しか明かりが点いていないためか、部屋全体が薄暗く感じられる。窓と対面をなす壁面にある暖炉の上には、この部屋の雰囲気とは似つかわしくない燭台があったが、一度も使用した形跡を持たないそれは、必要から置かれているわけではないようである。

その暖炉の隣には天井まで届く大きな書棚があって、整然と並べられた書籍はアリマールが読まなくなった物ばかりだった。だが、その中にストイナ王国の神話に歴史、あるいは、民話といった類の書籍が混じっている。それを知っているのは、カリファスとハドウエル、そして、贈り主であるアリマールの三者だけである。外出することの許されないカリファスを不憫に思ったアリマールが、秘かに市井で買い求めた物で、装丁を変えろという細工まで施してあった。アリマールは、それらを他の書籍に紛れさせて持ち込むと無言で置いていったのだった。

そうした中に、カリファスの所有が一冊だけあった。ストイナ王家の王統譜がそれである。炎上する城で、父から形見として受け取ったそれは、カリファスが何者であるのかを証明する唯一の物であるに違いないだろう。

カリファスの以後、誰の名も記されることはないのだろうが、ストイナ王国が確かに存在したことの証左である。衣服の下に隠して、文字通り肌身離すことなく持ち込んだ。書棚の一番高い場所、違う本を前に並べたその奥に隠してある。

サリハールはその書棚の前に立って、疑わしげな一瞥を書籍に投げた。天井で揺れる蠟燭の淡い明かりが、彼の金髪を赤く染める。長身でありながら猫背の姿勢が彼を気弱に見せたが、薄い茶の瞳に

宿る明瞭な憎悪と嫌悪が、彼の性格が外見からくる印象とは異なることを物語っていた。兄弟であっても、アリマールとは似て非なるものが感じられる。

それまで身体を休めていた長椅子から慌てて立ち上がって、カリファスはサリハールを迎えた。すでに太陽は天空にはなく、東の空では星が瞬いて夜の訪れを告げていた。むせび泣く声も絶えて、王の死を儀式化するための慌ただしさが、本来あるべき夜のしじまを騒がせている。そうした喧騒に背を向けていたカリファスの静寂は、突然現れたサリハールによって無残にも切り裂かれようとしていた。部屋の中央、卓台に添えられた長椅子の肘掛けに置いた手に力を込めて、カリファスは佇立したままサリハールの行動を視線だけで追った。書棚に隠した秘密だけは、決して知られてはならない。

書棚に向いていた視線が、カリファスを捉えるとサリハールは悠然とした口調から悪意を紡ぎ出した。決して隠そうとはしない、むき出しの悪意がカリファスを容赦なく襲う。

「まずは、申し開きを聞こうか、カリファス」

そう言われたところで、カリファスは何に対して申し開きをする必要があるのかわからない。エドワルの死去に対する悔みの挨拶をまだすませてはいないが、それを咎めるためだけにサリハールがわざわざ自身で出向いてはこないだろう。カリファスが返答に窮している、サリハールが言葉を続けた。

「わが父たる国王を殺めた理由……」

愉悦を含んで、サリハールの口の端がわずかに歪む。意図を察したカリファスは慄然とした。寸分の時間も無駄にすることなく、父親の死までも利用してカリファスを陥れようというのだ。サリハールの悪意の大きさに、カリファスは改めて戦慄さえも覚えた。

「……いや、愚問であったな。おまえにしてみれば、祖国の仇を討ただけのことであるのだろうか」

紡がれた悪意は、見えざる白刃となってカリファスを貫いた。動揺を気取られまいと、握りしめた肘掛けに一層の力を込める。そうしなければ、立っていることさえ危ぶまれた。沈黙を唯一の盾として、カリファスはサリハールと対峙する。主に代わって反論しようとするハドウェルを、片手を上げて制止したのは意識してのことではない。

「不思議とは思わぬか？ あれほどお元氣であられた父上が、おまえの誕生日を境に体調を崩されたのだ」

カリファスがまとった何者をも寄せ付けないであろう静謐さは、常人であれば気圧されて言葉を失ったことだろう。だが、サリハールは常人ではなかった。

「毒でも盛ったか、カリファス？ 今まで育ててもらった恩を忘れて、おまえが父上を殺めたのだ。忘恩の徒、とはおまえのことを言うのだろうな」

挑発しているのは明確だった。だからといって、カリファスにサリハールの期待に応えてやらなければならない義務はない。一度目を閉じて何事かを思案したカリファスだったが、再び見開いた瞳に決然とした意志を宿してサリハールを真っすぐに見据えた。

「まこと、殿下のおおせになられる通りであればよいのですが……」
つぶやいて、続ける。

「……わたしがエドワル陛下より賜ったのは、祖国の滅亡にございましょうか。その結果として、母と姉は自裁して果て、父は孤独のうちに黄泉へと旅立ちましてございます。これが、殿下のおおせになられる、恩にございましょうか」

「だから、殺めたか？」

「いいえ、わたしは祖国の恨みを晴らす機会を、自ら放棄いたしました。誤解のないよう申し上げれば、わたしはエドワル陛下を弑することに、畏れを覚えたのでございます。そうすることで、一度得た治に再びの乱を呼び込むことは、わたしの本分とするところではございません」

世が安定し、平和であれば決して出会うことのなかった者同士が、為政者の掲げる大義のために傷付き殺し合う、そんな戦を見てきた。「……わたしは、あのような光景を、二度と見たいとは望みません。何があるうとも、決して」

そういつて、言葉を結んだカリファスは、次の瞬間、サリハールの表情が醜く歪むのを見た。瞳に宿していた憎悪があふれ出て、顔全体に広がったかのようにでさえあった。もともと、美男でもなければ醜男というわけでもなく、平凡な容貌であったが、今ではそれさえも見る影のない醜悪なものに変わっていた。

「おまえのその言葉を詭弁と言うのだ！ それでアリマールはだましても、このわたしはそうはいかない。おまえの本性、必ず暴いてやるから、覚悟しておくのだな」

思い込みというものは、強ければ強いほど本来の形を歪めてしまう。だが、それでも信じてしまえば、ひとつの真実であることも確かであるだろう。サリハールの信じる真実が、まさにそうであるのだとして、彼は偽りを信じたわけではない。サリハールは自らが生み出した真実を信じたにすぎない。あるいは、信じたかったのかも知れないが。

「よいか、次代の王はこのわたしだ。それを忘れるな、カリファス」生殺与奪の全権を握っているのは自分なのだ、サリハールはそう言いたいのだろう。そして、これがカリファスに対する宣戦布告でもあるのだろう。訪れた夜の闇の中に、サリハールの狂気に憑かれた笑い声だけが響く。自らが唯一の勝者でもあるかのように、高く声を上げて笑う様は、ずっと以前からこの瞬間の訪れを待ってでもいたのではないか、とカリファスには思えた。

エドワルという絶対的な庇護者を永遠に失ったことで、カリファスの運命は大きく動き出そうとしていた。傍観することの許されない潮流に、流されるしかないのか、抗うことができるのか、この時

のカリファスには自らの行く末を知る術はなかった。それは、カリファスだけでなく、彼を取り巻くすべての者に共通したのだろうか。その、望むと望まざるに関わりなく。

聞（前書き）

第三話です。少し長めになってしまいましたが、お付き合いください。

闇

明けない夜はないという、止まない雨もないという。それは、夜明けがどこからくるのかを、雨の上がった青く晴れた空を、知っているからだ。だが、それを知らない者にとって、夜はいつまでも夜であり、雨はいつまでも止むことはない。

太陽は一体、どこへ行ってしまったのだろうか。

サリハール、という嵐は過ぎ去ったはずであるのに、心を覆う暗雲は一向に晴れる気配をみせなかった。却って、苛立ちが増しただけでしかなく、ハドウェルは猜疑を込めてカリファスを責めた。見つめる視線の先で、カリファスは誰にも真似できないであろう優雅さでもって、長椅子に腰を下ろすと額にかかる前髪をかき上げた。

「カリファスさま、先ほどの、サリハール殿下に対するお言葉、まさかご本心ではありませんまい？」

祖国の恨みを晴らす機会を放棄した、カリファスはそう言った。いつかエドワルを弑して、ストイナの、今はもうその名をただ地名に留めるだけとなった故国の屈辱を晴らしてくれる、ハドウェルはそう信じていた。だが、カリファスにはその意思さえなかったのだろうか。それは、今もおストイナの地で、カリファスを支持する者たちに対する裏切りに等しいのではないだろうか。

ハドウェルが見守る中、カリファスは正面を見据えて答えた。

「サリハール殿下には、偽りなき本心を申し上げた」

「では、カリファスさまは……」

「ハドウェル！」

続く言葉の先をハドウェルから奪うと、カリファスは珍しく声を荒げた。それで、この若者の声音の美しさが損なわれることはなかったが。

「わたしとて、恨みのすべてを忘れたわけではない。しかし、エドワル陛下が身罷られて、これ以上、誰を恨みに思えばよいのだ？」

うめくような口調は言葉だけではなく、これまでカリファスが心に流し続けた血までも一緒に吐き出しているかのように、ハドウェルには聞こえた。顔を伏せてうなだれる姿は純粹に美しい、と感嘆するには痛々しく、背中に流れる束ねた黒髪はカリファスが背負う闇そのものでもあるかのようにだった。

しかし、何故これほどまでの思いをしてまで、カリファスは耐え忍ばなければならないのだろうか。ハドウェルは思う、同じ忍耐を必要とするのなら、異なる生き方もあるのではないだろうか、と。その思いが言葉となって、ハドウェルの口から発せられた。

「何故、戦おうとはなさらないのですか？ ストイナの地あまたで数多の者が屈辱に耐えながらも、マルニアーム王国の支配を受け入れるのは、何のためにございましょうか」

「……」

「いつかカリファスさまがお戻りになられて、国土のすべてを解放してください、と信じているからなのではありませんか。そんな彼らのために、王として彼かの地に帰還するために、戦ってはくだらないのですか？」

「戦う？ このわたしが？」

顔を上げたカリファスは悲しげに笑って、そして、首を左右に振ると静かに言葉を紡いだ。流れる声音は何物にも喩えようがないほど美しくあったが、それ以上に口調は悲哀に満ちていた。

「わたしがそれをすれば、父上が護りたかった『もの』を、すべて幻想にしまうことになるだろう」

それが何だというのだろうか、ハドウェルは沈黙したが、内心はもどかしくてならない。何を躊躇い、何を恐れる必要があるというのだろうか。

「エドワル陛下、そして、それに連なる血筋を討ったところで、過去は戻ってはこない」

「過去を取り戻すことができずとも、カリファスさまが、ストイナ王国の正当なる継承者である、あなたがおられれば、王国を再興し未来を築いていくことはできましょう」

しかし、それでもカリファスは首を縦には振らなかった。

「ハドウェル、今のわたしにも、国はあるのだ」

「このような所であって、どこに国がある、とおおせになられるのですか？」

「……わたしは、父上を弱い人だと思っていた」

ハドウェルの背後に広がる、窓外の闇を見つめて自嘲気味につぶやいたカリファスの言葉は、ハドウェルの問いかけの答えとしては見当違いもはなはだしいものだった。だが、さらに続くカリファスの言葉を、ハドウェルは苛立たしさをいっそう募らせながらも聞き入った。カリファスは、決して無駄を語るようなことはしない。

歴史の古いストイナ王国は、文化と文明の起源だとされており、近隣諸国で広く「西海暦」が用いられる所以もそこにある。それは、国がその形を消失した現在も、同様であった。

内陸にあって陸の交通の要所を押さえるマルニアーム王国とは違い、海に面して海上貿易の中継地として発展してきたのがストイナ王国である。この二国に、軍事に強化したフェルタ王国を加えて、西海の三大王国と呼んだのはかつてのことである。

海のストイナ、陸のマルニアームと呼称される中で、フェルタ王国に付いたのが、剣のフェルタの異称であった。この三国の均衡が他の小国を含む、「西海」の安寧を維持していたことは、否めない事実でもあったろう。その均衡を最初に崩したのが、剣のフェルタであった。

すべては西海からもたらされ、西海を通じて世界に広がる。これは、ストイナ王国の富を評した言葉で、マルニアーム王国はその富が妬ましかったし、フェルタ王国は二国の富が欲しかった。

あるいは、巨大に膨れ上がった軍事を持て余した結果であるのか、剣とは血塗られずして鞘に納まることができないのか、フェルタ王国はマルニアーム王国に切っ先を向けた。それがストイナ王国でなかったのは、地理的にマルニアーム王国に隣接していたからにすぎず、それ以上の理由はなかった。

よって、宣戦の口実はいたって単純なもので、マルニアーム王国の国境巡検士の一団が越境してフェルタ王国領に「侵攻」した、というこじ付けだった。だが、一度開かれた戦端は、勝者と敗者を明確にするまで終わることを知らない。そして、後世において「ファブリック平原会戦」と命名される戦^{いくさ}において勝利したのが、フェルタ王国だった。

勝者は敗者の側に講和の条件として、当時マルニアーム王国の次期女王として即位することが確定していたシスタリアにそれを放棄させ、代わりに自国の親王エドワルをシスタリアと婚姻させて王として即位させるよう強要した。西海暦三二六年、初夏のことである。やがて、マルニアーム王国の国王として即位し、国内を掌握したエドワルは母国フェルタ王国の父王が欲した富を求めて、ストイナ王国へ侵攻を開始した。マルニアームとストイナ、両方の富を掌中にするのが叶えば、西海の覇者にもなれるに違いないだろう。そうはいっても、フェルタ王国の支援は欠かすことができなかった。こうして、西海暦三四五年七月から、実に四年にも及ぶ「ストイナ戦役」が始まった。

しかし、マルニアームとフェルタの両国による、ストイナの富の分配は戦が終決して七年を経て、未だに確定してはいない。

フェルタ王国の支援を全面的に受けたマルニアーム王国は、圧倒的な物量を背景にして、破竹の勢いでストイナ王国を攻めた。それを四年に渡って戦線を維持し続けたストイナ王国も、よく善戦したと称賛するべきだろう。だが、物量の差は戦線の拡大と共に補いよ

うがなくなり、ついにストイナ王国に綻びが生じた。

一度生じた綻びに対して、取り繕う暇をあたえることなく、マルニアーム王国軍は一気に王都を目指し、ベルムアを包囲した。だが、ストイナの各地に散っていた部隊は集結を謀り、都を囲むマルニアーム王国軍の後背を突こうとしていた。逆にいえば、それまで何を犠牲にしても耐え切ることができれば、勝機はストイナ王国の側にあったかもしれないのだ。

しかし、結果としてストイナ王国最後の王となったカリファスの父エングレンは、降伏という道を選択した。ベルムアを囲まれて二日目の朝、城壁の向こう側に現れたのは数台の櫓だった。堀を持たなかったベルムアの弱点を突かれたのだった。

巨大な攻城櫓を背にして現れた特使は、櫓を見上げる者たちに向けて、これ以上の抵抗を続けるのであれば火矢を放って都を焼く、と恫喝した。それで本当に王都が一切を残すことなく灰燼に帰することもなかっただろうが、実際に火矢が放たれていれば、戦という大義の名の元に行われた虐殺が敢行されていたかもしれない。

それが勝利のための唯一ではなかっただろうが、そうしなければ彼らとて背後を脅かされかねない。千載一遇の勝機がそこにあるのだ、とすれば躊躇う理由はなかったに違いない。エングレンが恐れたのがその可能性であったとして、彼が最も恐れたことは、このまま破滅の道を歩むことだった。

王国の独立と王家の存続、それよりも、民の生活と文化の継続により価値を見出した結果、エングレンは降伏を受け入れた。点が線を成し、線が形を作るのであれば、点はすべての源になれる。滅びてすべてを無に帰するよりかは、全体の中の点となって存続することを選んだのだ。

エングレンの想いが通じたのか、現段階において、ストイナ王国はマルニアーム王国の支配を受けながらも、内政の自治を認められていた。ただし、マルニアームの方針が何を置いても優先される、形骸だけの自治にすぎなかったが、少なくとも、点が残ったことに

なるだろう。

窓外に広がる夜の闇の中に、カリファスは在りし日のエングレンの姿を見付けて断言した。

「……小さな点であっても、文化の息吹を残すことができれば、降伏も屈辱にはならない」

見つめる闇の向こうで、父がうなずいてくれたように思うのは、カリファスの錯覚が見せた幻影だろうか。それでも、カリファスはその幻想を信じて続けた。

「父上は、そうお考えになられたのだろう。それでも、父上は玉座を汚されることを厭われて、城に自ら火を放つよう命じられた」

それが敗者にできる、勝者に対するささやかな抵抗であったろうか。そして同時に、エングレンの意地と矜持に対するささやかな勝利でもあっただろうか。燃え盛る炎の轟音は、エングレンの発した勝者に向けた嘲笑であったのかもしれない。

「わたしは、父上の遺志を護っていいこうと思う。いや、護りたいのだ。そのために、わたしは戦っていいこうと思う」

紡ぎ出されるカリファスの言葉を、ハドウェルは無言で聞いている。もはや、苛立ちも腹立たしさもないようだった。

「戦いとは、何も血を流すことだけではない、とわたしは思うのだ。流血を伴わない戦い、それに勝利することができれば、父上の正しさを証明できるのではないだろうか」

「その戦いで、カリファスさまの敵は何にございましょうか？」

面と向かってそれを問われると、カリファスには即答できかねた。闇に映る幻像から答えを得ることは叶わなかったが、カリファスが護りたいと思うものなら明確な答えがあった。それは、父エングレンの遺志であり、さらにもうひとつあった。敵というのなら、それらを脅かす者のことでもいうのだろうか。

「わたしにとっての国である、この部屋と、わたしの国のただ一人いちにん

の民であるハドウェル、そして、部屋の外に広がる平和……」

そこで一度言葉を切ると、カリファスはハドウェルに微笑みかけた。そして、大事そうに言葉を続けていく。

「……そうしたささやかなものが保たれれば、ストイナの民も安寧を得ることができるようではないだろうか。それで永遠に滅びることのない、確かなものがあるはずなのだ」

明朗とした口調で、カリファスは言葉を結んだ。今はまだ、その確かなものが何であるのかわからないが、それでも、姉が望んだように生きることに対して貪欲なまでにあがいてみよう、とカリファスは思うのだった。

「カリファスさま、わたしだけでも、あなたのささやかな国の民であること、うれしく思います。ですが、民は、王の盾にもなり剣にもなれるのだ、どうかお心の隅にでもお留めおきください」

カリファスのためなら自分は死をも恐れない、とハドウェルは言うのだ。思いは痛いほど伝わってくるというのに、今のカリファスにはハドウェルの思いに応えてやれることができそうになかった。

「シスタリア王后陛下にお目にかかって、お悔やみ申し上げるのは明日にしよう」

今のカリファスには、それだけしか言えなかった。

ハドウェルが退室してひとりになった空間に、窓を叩く風の音が響いた。それは、小さな音だったが、他に阻む音もなくカリファスの注意を引くには充分だった。長椅子から立ち上がると、何かに導かれるようにして露台に出た。

風が湿気を含んでいるように感じられるのは、近づく雨季のせいだろうか。だが、星だけはあの日と同じように、天の高みにあって燦然と瞬いていた。

「成人の祝いだ」

そう言って、エドワルがカリファスにくれたのは、ストイナ王家

の紋章が刻まれた一本の剣^{こるぎ}だった。同時にそれは、父エングレンが落城の折りに帯びていた剣でもあった。つまり、カリファスにとつて、形見ともいえた。手入れのなされた剣が見せた、妖しくも美しい白刃の輝きに、一瞬とはいえ心動かされなかった、と言えば完全な嘘になるだろう。

しかし、カリファスは自重した。エドワルをその場で刺し貫くことは、容易であつたかもしれないが、続いたエドワルの言葉がカリファスを引き止めた。力強く響いた声音が、鼓膜の奥に甦る。

「おぬしが信じる正義を貫けばよい」

責任を負う覚悟があるのならこの自分を殺してみよ、そう言われたような気がした。だが、カリファスの信じる正義は、エドワルを貫くことになかった。ハドウェルにも語ったように、カリファスは「現在^{いま}」を護^{まも}りたいだけなのだ。

「……それで、よろしいですか、父上」

もちろん、誰が答えてくれるわけではない。見上げた星空に、溜息をもらしてカリファスは露台を後にした。今のカリファスにとって、剣とは不要な物でしかない。それを知らしめるためではなかったが、暖炉の上に飾った燭台にも白刃は存在しなかった。

「明かりを見付けることがおできにならないのでしたら、明かりを点せばよろしいではありませんの？　そのために、これを持ってまいりましたわ」

自分は暗闇の中にいるのだ、いつだったか、ラリアンヌにそう語ったことがある。そのカリファスの言葉をどのように解釈したのか、幾日かしたある日、ラリアンヌはそういつて燭台を贈ってくれた。胸の前で剣の柄を抱いて、首を傾げた乙女を意匠した銀細工の燭台である。乙女の抱いた柄に刃^{やいば}はなく、そこに蠟燭を立てることで初めて剣は白刃を得られることができる、というわけだ。

暖炉の前に立って、その燭台を手にとるとカリファスはつぶやい

た。

「ラリアンヌ姫、光明とは、自ら見出すものにございます」

もし、燭台に明かりを点すことで、闇から抜け出ることができるのなら、そうしてみたい、と思わなくもない。だが、それでもカリファスの抱える闇が晴れることがないことを、誰よりも彼自身が知っていた。

そして、西海暦三五六年一月二〇日、先王エドワルの喪が明けるのを待たずして、サリハールは第二六代マルニアーム王国国王として即位する。

時間だけが、留まることを許すことなく流れていく。果たして、どこへ導こうというのだろうか。生者の内でそれを知る者はいない。

前兆

西海暦三五六一年二月二〇日、マルニアーム王国第二六代国王となったサリハールは、誇らしげに王冠を頭上に戴くと玉座に着いて、居並ぶ諸官諸侯を見渡した。この瞬間、サリハールは得意の絶頂にあった。自らが世界の中心にでもなったかのような、心地よささえ感じていたに違いない。

しかし、見上げた兄の姿に、光が射しているようにアリマールには思えなかった。実際、この日は朝から天空は暗雲に覆われ、即位及び戴冠の儀が終わるころ、外は冷たい冬の雨へと変わっていた。それは、来る未来の波乱を予知していただろうか。即位を急いだ兄の胸中と、ここにいたる半年ばかりの言動を思うと、アリマールは不安を覚えるのだった。

形式通りに式典が終わると、夜を迎えるころには新王の戴冠を祝した盛大な舞踏会が催された。着飾った紳士淑女が世辞を肴に酒を傾けながら、新王の統治下における自身の利害を素早く算出していく。そうした間にも、華やかな衣裳をまとった令嬢たちを品定めすることを忘れない。陽気な音曲が流れ、艶やかな衣裳が華麗に翻った。

一段高い所にあつて会場を見渡していた新王は、侍従の差し出した酒を傾けて満足げにうなずいた。サリハールがこの場にはいないカリファスに思いを馳せたのは、まさにこの時であつたろうと思われる。もちろん、哀れんだわけではない。自らの権威を誇示する絶好の機会を逃したように思えて、それが悔まれたにすぎない。カリファスの置かれた立場がいかに惨めなものか、思い知らせることもできたのではないだろうか、と。

しかし、カリファスは先王を弑逆した科人とがにんでもある。そのような

男を、宴席に招くわけにはいかないだろう。罪状を明らかにし、速やかに極刑に処すべきであるのに、これに関しては誰もが反対を主張するのだった。

宮廷医のひとりは、エドワルが毒殺された可能性を否定しなかった。何よりも、カリファスには動機がある。ただし、サリハールの主張する通り、カリファスの実行したことであつたとして、それを裏付ける証拠は何ひとつ存在しない。そもそも、どこから毒を持ち込めたというのだろうか。カリファスが首謀したにしても、彼に内通した者がいなければ毒を用意することもできないはずである。もちろん、同じく囚われの身であるハドウェルにできる仕事ではない。カリファスの罪を明らかにするには、まずは内通者を見付けなければならぬ、とする宰相を筆頭にした先王派の意見に圧されて、新王は一応にせよ手を引つ込めざるを得なかった。

その宰相の姿を会場の一隅に見付けて、いつそのこと罷免してやろうか、と新王は腹立たしく考える。諸官の主だった長を集めて談義をしているようだが、先王が身罷つたと同時に引退するのが筋であるだろう。それを、王太后となったシスタリアだけでなく、各大臣からも宰相の留任を進言されては従うしかない。宰相ひとりのために大臣をすべて解任したのでは、統治が乱れないとも限らない。そうなれば、フェルタの伯父を喜ばせるだけだろう。

今朝も現れたフェルタ王国の領事が見せたしたり顔を思い出して、サリハールは小さく舌打ちをした。エドワルのころから遅滞している、ストイナの富の分配を求めてきたのだ。領土の半分はどう見繕つてみても虫がよすぎるだろうし、応じなければ一戦するも已む無しとは恫喝もすぎるといふものだ。

晴れがましい気分も消え去ってしまい、サリハールは露骨に舌打ちして侍従の不審を買った。それをごまかすために、これまた会場に姿の見えないアリマールはどこに居るのか、と尋ねた。ただし、明確な答えを得ることはできず、苛立ちを募る一方だった。

暗い天の高みから落ちてくる雨粒は、砕けた星の欠片であるのだろうか。それとも、誰かが流した涙であるのだろうか。流れる楽音に背を向けて、アリマールは石畳の中庭を叩く雨を庇ひさしの下から見つめて大きな息を吐いた。吐き出した溜息は、大気に白く浮かんで消えていった。

「アリマール、ここにいたのですね？」

雨音に気配を忍ばせて近付いてきたのは、シスタリアだった。すらりとした長身で、誰もが認める美人である。結い上げたくすんだ金髪に、真珠の簪かんざしを挿していた。今夜、アリマールの金髪を飾るのも真珠であったが、ただの偶然であるにすぎない。

微笑して振り返ったアリマールだったが、その先に母の気鬱な顔を見付けて、彼は表情を改めた。息子が即位した、というのに母は一向にうれしそうではない様子だった。アリマール自身も、思いは母と同じであるから、シスタリアが何を憂いているのかは手に取るように分かるつもりだ。

声をかけてはみたものの、続く言葉を模索しているのだろう。無言で横に並んだシスタリアに代わって、アリマールが口を開いた。雨は変わることなく、降り続いていった。

「あまりご心配なさいませんよう、母上」

「……」

「カリファスどのが父上を毒殺したなどと、兄上おひとりがおおせになったところで、聞く耳を持つ者はおりません」

一度は収めた微笑を浮かべて、アリマールは努めて陽気にそう言ったが、シスタリアは悲しげに首を横に振るだけだった。

「兄上は、ストイナの地を完全に併合してしまうつもりはありませんよ」

「……いいえ、あなたが思うほど、あの子は利口には振る舞えないでしょう」

アリマールは冬の雨から母の横顔に視線を移して、その真意を疑

った。シスタリアはしばらく、夜を濡らす雨を見つめていたが、背後から聞こえていた音楽が途絶えたのを機に言葉を続けた。

「あの子は、サリハールはわかっていないのです。カリファスがストイナそのものであることを。カリファスを弾劾することは、ストイナを弾劾することと同義なのだということも」

そこで言葉を切ると、シスタリアは夜の闇へと一歩だけ歩を進めて、アリマールを振り返った。昨日まで着ていた喪服ではなく、冬晴れの空のような青い衣裳の裾が雨だれに濡れている。アリマールを見つめるシスタリアの青い瞳に宿るのは、雨の滴であるのだろうか。その笑顔は夜を照らす十六夜の月いざよひのようだ、と称えたのは誰だっただろう。今夜も雨さえ降らなければ、十六夜からさらに欠けた月が虚空にあったはずである。厚い雲が月を奪ってしまったが、シスタリアの笑顔を奪ったのは何であるのだろうか。

途絶えていた楽の音が、再び流れてきた。軽快で華やかな舞曲に乗るのは、陽気な笑い声ではなく、シスタリアの悲しい声音であった。

「今一度ストイナと戦火を交えることは、簡単なことです。ですが、今一度ストイナに勝利することは、容易なことではありません。彼らには、決して口実をあたえてはならないのです」

「母上……？」

「そのためにも、先王が存命であられたころ以上に、母はカリファスを弁護し擁護しましょう。アリマールもカリファスの味方をしてくれるのでしょうか？」

躊躇う理由が何であるのか見付けられず、アリマールは即答できなかった。再度、同意を求められて「はい」と短く応じたアリマールに微笑するシスタリアを目撃して、彼は奇妙な納得を覚えた。そして、背中を見せて去りゆく母の後ろ姿を見送って、納得は確信へと変わった。

これだから、兄はカリファスを許すことができず、憎しみを募らせるのだろう。背後から流れてくる音曲と、夜の闇に響く雨音を聞きながらアリマールは考えずにはいられなかった。

母にとって、カリファスは鏡に映る己自身なのだ。だが、父母という鏡に自己を映そうとする者にとって、そこに映り込む存在は疎ましく見えたに違いない。自分だけを映すには、邪魔なカリファスを排除するより方法を見付けられなかったのだろう。そして、排除しようとするほど、影はいっそう大きくなって、鏡を覗く者を拒むことになったのだ。

それは、単純に「嫉妬」と呼ばれる感情であっただろうか。

マルニアーム王国の王の一人娘として生を受けたシスタリアは、王と後の愛情を独占して成長した。成人すれば然るべき家から夫を迎えて、マルニアームの歴史でも稀有な女王となるはずだった。それが、フェルタ王国との戦いに敗れて、シスタリアの運命は大きく転換した。それまで、偽りと戯れの恋に興じていればよかっただけの乙女は、顔さえ知らないフェルタ王国の第二親王エドワルを迎えて、その后にならなければならなかった。

婚姻自体はシスタリア自身の問題であったが、彼女自身に決定権があるわけではなく、彼女の意向など考慮される余地とてなかった。王家に生を受けた女として、あたえられた運命をシスタリアは受け入れた。

もしも、シスタリアが運命を拒絶していたならば、両国はさらなる戦に突き進んでいたかもしれない。少なくとも、フェルタ王国が黙って引き下がることはなかったはずだ。シスタリアに提示された運命は、否と首を振る我がままさえ許されなかったのだ。

この婚姻がひとまずの悲劇を回避したのだ、としても、それ以後の悲劇の起因となったことも、またひとつの事実であっただかもしれない。それで一体、シスタリアに何の責任があるというのだろうか。

戦によって運命を変えられたシスタリアにとって、同じように戦に運命の変遷を強いられたカリファスに、かつての己を重ねたのはあるいは必然であったかもしれない。しかも、少年は自身よりもさるなる過酷な運命を背負って現れたのだ。引き結んだ唇に精一杯の虚勢を張って、毅然と佇む少年の瞳には不安と恐怖が宿っていた。それでも、傲然と頭を上げ正面を見据える姿は、さすがはストイナ王家の男子である、とエドワルさえも唸らせたものである。

しかし、シスタリアは目の前に佇立した少年を、優しく抱きしめて、その耳元にささやいた。

「何も恐れることはありません。今はまだ、運命はあなたに冷淡であつたとしても、必ず運命はそれに似合うだけの幸福をあたえてくれるでしょうから」

シスタリアにとって、不幸と思えた結婚はこれ以上ないほどの幸福となった。エドワルはシスタリアを誰よりも深く愛してくれたし、彼女もまた彼を愛した。過去きのうを幸せに思えなくとも、現在きょうを幸せに思えばいい、それで、未来あすの幸せを願うこともできるのだから。カリファスにもいつかは幸福な時間ときが訪れるに違いない、とシスタリアは深く信じた。

こうして、シスタリアはエドワルの死後、実に五年にも渡ってカリファスをサリハールの脅威から護り続けた。彼女自身が息を引き取る、その最期の瞬間までカリファスを案じ続けた。喻えそれが偽りであろうとも、築かれた安寧を壊したくなかつただけであつたかもしれない。それとも、これ以上誰かが戦によって、運命を変えられる様を見たくはなかつただけであつたかもしれない。

そうであるのだとすれば、彼女の願いは運命を司る何者かの失笑を買うだけのものではなかつた。

つむじ風

幸福から目を背ければ不幸しか映らないのだとしたら、不幸から目を背ければ幸福だけが映るのだろうか。

先王エドワルの国葬と新王サリハールの即位、二つの相反する行事も無事に終わり、新年の祝賀も落ち着きを見せ始めた、西海暦三五七年一月も半ばをすぎたある日のことだった。その日は、春を先取りしたかのような陽気を受けて、冬のただ中であるにもかかわらず温かい一日となった。

そんな日の午後、カリファスはシスタリアの訪問を受けた。サリハールの即位を機に喪服を脱いだシスタリアは、明るい緑の衣裳をまとっていた。袖口と裾周りには緻密な花の刺繍がなされており、待ちわびる春の到来を、そこに見るような華やかな刺繍だった。

衣裳の裾を優雅に広げて長椅子に座ったシスタリアは、佇立したままのカリファスに、自身の隣に着席するよう勧める。思い返せば、子供のころからこうやってカリファスを隣に座らせては、彼の身を案じてくれたものである。

「このところ、部屋にばかりこもっているそうですね？」

そうシスタリアから問われて、カリファスは返答に窮した。いいえ、と答えれば嘘になる。だからといって、はい、と応じればシスタリアを心配させるだけだろう。結局、どちらも選べずにカリファスが沈黙していると、シスタリアが言葉を続けた。

「少し、庭を歩いてみませんか？」

そういうと、シスタリアは自身の侍女を振り返って、カリファスの外套を用意させた。別室から侍女が持ってきた外套を、カリファスがまとう時間も惜しむようにして部屋の外へと連れ出した。そして、廊下を並んで歩いていると、正面から慌ただしい足音が響いて

きた。何事だろうか、と凶事の予感に足を止めたカリファスとは対照的に、シスタリアは悠然と歩を進めていく。

廊下の曲がり角から姿を見せたのは、シスタリアの侍女のひとりで、後ろに従う侍女とは違って老年の女だった。その侍女は女主人の前で一礼すると、彼女の耳元に何事かをささやき始める。その言葉にうなずいたシスタリアは、大袈裟にすぎるほど驚いて見せた。

「まあ、それは大変！」

そして、カリファスを振り返って続ける。

「カリファス、『春の庭』へ先に行って待っていてください。わたしは所用をすませてから、すぐに参りますから」

「何事が起きたのですか？」

騒ぐ心を抑えて、カリファスが問いかけると、シスタリアは笑って言った。

「あなたが気に病むほどのことはありません。それよりも、『春の庭』ですよ、間違えないように」

シスタリアがカリファスに指示した「春の庭」は、当然のことながら、あきれるほど広い王宮の中庭のひとつである。点在する花壇の今はまだ、地中に眠る花の芽もやがては訪れる春に咲きそろえば、この中庭に着飾った人々が参集して賑やかな園遊会が催されることになっている。ただそのためだけに設けられた庭を、「春の庭」と呼んだ。冬の間の寂しいだけの庭を、わざわざ好んで散策する者はまず誰もいない。

その「春の庭」を当てもなく歩いたカリファスは、思いもかけない人物を見付けることになった。

赤煉瓦の建物を背景にして、冬枯れの木立が規則正しく整列するその下、等間隔に並んだ石造りのベンチに、腰をかけてうつむいているのは、ラリアンヌその人であった。

明るい茶色の温かそうな衣裳をまとい、膝の上には本を乗せ、

その上に両手を重ねて置いたラリアンヌの姿は、まるで置き忘れられた人形のように果敢無く見えた。歩み寄るカリファスの足音に、降り注ぐ陽光に輝く肩にかかる黄金の流れを、誰もが認める美しい髪を揺らして、ラリアンヌは顔を上げた。

その瞬間、カリファスの視線がラリアンヌの眼差しと交差した。距離にして、五歩くらいだろうか。言葉もなく歩みまでも止めてしまったカリファスを、ラリアンヌは無言で見返してくる。

いつもであれば、アリマールが同席していたし、そうでなくとも、侍女の二、三人は必ずラリアンヌのそばにいた。彼、もしくは、彼女らが両者に席を勧め、会話まで用意してくれるのが常だった。不器用な王子と、初心な姫君の仲を「橋渡し」してくれる存在は、この日は誰もなく両者はそのまましばらく互いを見つめあった。

一体、どれくらいの時間を両者はそうやって、ただ見つめあっていただろうか。痺れを切らした意地悪な風が、砂塵を巻き上げて吹き抜けていかなければ、いつまでもそうしていたかもしれない。風から身をかばうように、カリファスは佇立したまま片手を上げ、ラリアンヌは座したままでこちらも片手を上げて、風に背中を向けるために上体を小さくよじった。その拍子に、膝の上の本が滑り落ちてしまった。

慌てて本を拾い上げようとラリアンヌの伸ばした手に、カリファスの手が触れた。ラリアンヌは驚いて手を引っ込めて、そのままカリファスの手が触れた自身の右手を胸の前で、愛おしそうに左手に包み込んだ。

一瞬だけ躊躇うように握りしめた手を解いて、カリファスはラリアンヌの足元に落ちた本を拾い上げて、大袈裟に埃を払うとうつむいている彼女に差し出した。差し出されたそれを、ラリアンヌは受け取る代わりに、ささやくような小さな声で問いかけてきた。

「どうして、カリファスさまがいらっしゃるのですの？」

「王太后陛下に、こちらで待つよう言われたのです」

「わたくしも、同じですわ。お母さまから、ここで待つように、と……」

そのラリアンヌの言葉で、カリファスは確信した。これが、シスタリアの来訪の真意だったのだ、と。別れる間際に見せた驚きは、シスタリアの芝居であったのだ。思えば、シスタリアの驚き方は不自然ではなかったか。

「サリハール兄さまから、カリファスさまとお会いしてはならない、といわれているのです。それが、こうしてお会いできたのです。わたくしが、どれだけ驚いたか、おわかりになりました?」

そう言って、ラリアンヌはようやく顔を上げた。喜びに微笑む様の愛らしさに対して、カリファスは何と言えよいかわからなかった。こんな時、アリマールがいれば気の利いた言葉のひとつでも口にして、場の空気を和ませてくれるのだが。

そのアリマールの代わりに、この場に緊張を呼び込んだのは、ラリアンヌのもうひとりの兄、彼女にカリファスと会うことまでも禁じたサリハールだった。

後日、ラリアンヌはどれだけ後悔したことだろうか。何故、あの時にもう少しちゃんとカリファスと話さなかったのだろうか、と。あまりに突然現れたカリファスに驚いて、それ以上に、うれしくて言葉は何も出てはこなかったのだ。それで、どれだけの時間を無駄にしまったことだろうか。あの時間は永遠に続いていくのだ、と思っていたのだ。

しかし、ラリアンヌの後悔は後日のことであって、この瞬間のことではなかった。

「その詩集の最初の作品……」

未だカリファスが立ったままであることにさえ気が付かないで、ラリアンヌは彼が拾ってくれた本を指して笑いかけた。母が持参

するように、と勧めてくれた詩集で、昨今人気の詩人が著わした社交界でも話題の詩集である。そのことをラリアンヌは説明して、さらにその内容をカリファスに紹介しようとした矢先のことだった。近付いてくる複数の足音に、ラリアンヌは母が来たのだ、と足音のする方に視線を向けた。それで言いかけた言葉の先が、永遠に断たれるなどと思いもしなかったことだ。まさか、この今は誰からも見捨てられた「春の庭」に、サリハールが現れようなどと誰に想像することができただろうか。

「ラリアンヌ、わが妹、何を勝手な真似をしているのだ？」

背後に三人の騎士を引き連れて、サリハールはラリアンヌに向けてそう言った。口元から顔全体へと広がった笑みは、ラリアンヌに恐怖をあたえるに充分だった。発せられる言葉は呪詛ではないか、とラリアンヌには思えた。

「部屋を訪ねれば、侍女どもがラリアンヌはここにいるだろう、と簡単に教えてくれたぞ」

「……」

「誰かと一緒だろうとは予測したが、余には知れぬと思っていたか？」

一人称を改めたサリハールは、ラリアンヌにとって見知らぬ異国の王でしかなかった。傍らに佇立するカリファスの服の裾を知らずの内に握りしめて、ラリアンヌはサリハールを見返した。視線を逸らすことが、単純に恐ろしかったただけであったのだが、サリハールの方から視線を逸らしてくれたのは、ただの偶然ではなかった。サリハールの視線の赴く先を追ったラリアンヌは、それが自身の握りしめた手にあるのだ、と知って慌ててカリファスの服の裾を離した。そうしなければ、カリファスまで巻き添えになってしまうのではないだろうか、と思ったのだ。

しかし、時すでに遅く、サリハールの矛先はカリファスに向けられた。

「カリファス、ラリアンヌはフェルタ王国の、われらが従兄どの

といずれは婚約させるつもりだ。横恋慕などされては、迷惑というもの」

驚いたのは、ラリアンヌも同様だった。見上げた視線の先に、カリファスの眼差しがあった。交差する両者の思いを断ち切ったのは、サリハールの次の言葉である。

「ラリアンヌを部屋へ連れて行け」

背後の騎士に向けて命じたサリハールは、忠実に命令を実行する騎士を確認して満足そうに笑った。

「……カリファスさま！」

両脇を騎士に挟まれて、それでも、ラリアンヌは懸命に手を伸ばした。だが、その手がつかんだのは、螺旋を描いて天空へ昇る風でしかなかった。

さすがのように伸びたラリアンヌの手は無論のこと、彼を追い求める彼女の視線からも逃げ出して、カリファスは下を向いていた。懸命にカリファスを呼んでいたラリアンヌの悲鳴が、風の向こう側から今も聞こえてくるのは気のせいだろうか。

奪われることに慣らされた結果、奪われてもそれを当然と思い、あきらめるもうひとりの存在をカリファスは自身の内に見付けていた。だから、目の前からラリアンヌが連れ去られても、心動かされるはずなどない。それだというのに、何故、これほどまでに気持ち乱れるのだろうか。

天空を見上げたのは、そうしなければ、あふれてくる思いを抑えることができなかったからだ。カリファスは、青くどこまでも青く続いていく彼方を見つめた。そして、強く握りしめた掌の中にある、ラリアンヌが残っていた詩集に、カリファスは視線を落とした。確か、最初の作品だ、とラリアンヌは言っていなかったか。

表紙を開いて、頁を捲る。そこに綴られた文字の羅列を目で追っ
てから、カリファスは再び天空を見上げて思いを馳せた。カリファ

スの周囲を、風はまるで意思ある者のように吹き抜けていった。

風に乗せて伝えよか 届かぬ想いわが涙

風に心があったなら

届かぬ想い雲にして あなたの空へと運ぶだろう

もしも、太陽陰ったら わたしのことを考えて

届かぬ想い わが胸に

鳥にゆだねて伝えよか 届かぬ想いわが祈り

鳥に言葉を話せたら

届かぬ想い歌にして あなたの窓辺に運ぶだろう

だから、さえずり聞こえたら わたしのことを考えて

届かぬ想い わが胸に

届かぬ想い いつまでも……

追想

……あなたを慕って流した涙は、風に乗せて伝えましょうか。風に意思があれば、あなたを慕うこの想いは天空を渡る雲にでもして、あなたの元へと運んでくれるでしょう。だからせめて、太陽が雲に陰った時には、わたしのことを思い出してください。どうして、想いを伝えられないのでしょうか。

……あなたの息災を願う祈りの言葉は、鳥にゆだねて伝えましょうか。鳥にわたしの言葉を理解することができたなら、あなたの元に歌にでも替えて届けてくれるでしょう。だからせめて、鳥のさえずりが聞こえた時には、わたしのことを思い出してください。どうして、想いを伝えられないのでしょうか。

……あなたのことを、わたしはいつまでも慕い続けております。

――『届かぬ想い』より、述懐

※ ※ ※

冬が終わって、季節は春を迎える。色を失っていた景色は待ちわびていた春の到来に、それまで地中深くで眠っていた花々が芽吹いて、多種多様な彩りを添えていく。花の季節が終わるころ山は新緑に包まれ、田畑を潤す恵みの雨季が訪れる。陰鬱な雨の季節が終わると、太陽の照り付ける夏が始まり、そして、秋が忍んでくる。山の木々が色付き始め、やがて、冷たくなる風に枯葉が散るころには、冬は目の前にまで迫っている。木々は枯れ、寒風に雪の舞う冬がすぎると、再びの春に喜ぶ。

そうやって、何度か四季が巡った西海暦三六〇年、夏の盛りの八月九日、マルニアーム王国の王妹ラリアンヌとフェルタ王国の第一親王にして王太子エリッツの婚約が成立したことが、両国において公表された。とりあえずの婚約で、婚礼の儀は未定とされたが、一説では旧ストイナ王国領を完全併合した後に執り行われるのではないか、と噂された。

流言の裏付けとして、マルニアーム王国国王サリハールが取った政策があった。

ストイナの自治政権を支える強力な地盤となっている、商都ルギアニの商人から成る組合の解体と、明け渡しを要求したのだ。王都とは離れた沿岸部に位置するルギアニは、戦災を免れて王都陥落後もそれまでと何ら変わることなく、商いを続けてきた。王家の直轄地であったこともあって、これまで歴代の王たちの多大な庇護を受けてきた町である。先王エングレン亡き今も、その王家に対する忠誠に一点の曇りはない。

そして、それが彼らの矜持でもあった。マルニアーム王国の要求は、その彼らの矜持を傷付けたのだった。さらに、自治政権の解散を迫られては、ストイナの憤りが頂点に達したことは間違いないだろう。これで、カリファスの身がマルニアームになれば、自治と自主、そして、自尊を掲げて一戦することも躊躇いはしなかったはずだ。

「……結局、カリファスどのを盾にとって、兄上はやりたい放題しようということなのだろう」

夏のうだるような暑さも過ぎ去り、秋の気配が感じられるようになった九月の終わりの午後、アリマールはカリファスを「春の庭」に誘い出してそう言った。もちろん、ここがカリファスにとって、忘れ難い場所であることをアリマールは承知で誘ったのだ。

シスタリアに仕組まれて、必然的に二人は遭遇したのだ。時間の

長短はいざ知らず、恋のひとつ語らうこともできないまま、サリハールによって引き離されたいきさつは、ラリアンヌから聞いたアリマールだった。カリファスさまはどうしていらっしゃるのでしょうか、涙を懸命にこらえて、そうつぶやいた妹は自らの運命みらいよりもカリファスの明日みらいを案じているようだった。

そして、そのカリファスが案じるのは自身の身の上ではなく、ストイナの動静なのだろう。背後に付き従うハドウェルも思いは同じようで、交わされる言葉に聞き耳を立てていることが気配で感じられる。アリマールは言葉を選びながら、ゆつくりとした口調で続けた。

「だが、兄上の無茶な要求を、ストイナの政権は拒絶した」

「……」

「何もすぐに、戦いくさということにはならないだろう。ストイナとしても、激発してカリファスどのの身を危険にさらしたくはないのだろうし、兄上にしてもこちらから戦をしかけても分がないことは、どうやら承知しているようだ」

そこまで語って、アリマールは一度言葉を切った。そして、並んで歩くカリファスの美貌を覗き込む。今年で二〇歳を迎えたその容貌は、絶世と呼んでも決して過言ではないだろう。男として生まれてきたことが、実に惜しまれる優艶の美を宿していた。だが、女として生まれていれば、別の運命をたどっていたかもしれない。その場合、どちらがより幸福であったのか、それを勝者の側に立つアリマールが論じてよいことではないだろう。

「あるいは……」

感情を隠して冷淡にも思えるカリファスの横顔から、見えてきたアシェリアの、葉を茂らせた緑の並木に視線を移してアリマールは独り言のようにつぶやいた。

「……あるいは、兄上はストイナを挑発しているのかもしれない」

「何のために、そのようなことを？」

変わらぬカリファスの美声が、わずかに震えているのは、それに

対する答えを予感しているのかもしれない。ストイナを激発させてそれを理由に一戦するため、その布石としてラリアンヌをエリツツと婚約させた。再び、フェルタの力を必要とするためだとして、婚礼を急がないのは、ラリアンヌを人質に差し出したが最後、協定を破る可能性を考慮したのかもしれない。フェルタにとって、マルニアームとストイナの両国が共に倒れることは、願ってもないことであるに違いないからだ。

しかし、アリマールはそれらすべての言葉を呑み込んだ。憶測で口にするには、あまりにも危険がすぎる。そこで、彼は別の言葉で答えた。

「わからない」

そして、内心で苦笑する。三番目の答えだ、アリマールはハドウエルを肩越しに振り返って思った。夏の名残りを含んだ風が、アリマールの金髪を揺らした。

麗らかな春に咲く花、もしくは、春に咲く麗しき花、二つの意味を持つ麗春花れいしゅんかとも呼ばれるアシェリアは、厳しい冬の寒さを耐えて、春の暖かな陽気に薄紅の花を無数に咲かせる。五弁の小さな花は、幹から伸びた枝を賑わせ、満開を迎えると同時に散り始める。

その絢爛と咲き誇っていた名残りの跡もなく、今は茂った緑に揺らめくだけであった。やがて、秋が深まるにつれて緑の葉は赤く色付き初め、冬を間近にするころには赤く染まって枯れ落ちる。

花の華麗さには劣るものの、風にそよぐ赤い葉が、観賞に耐えないわけではない。だが、「春の庭」と呼ばれるように、舞い落ちる葉に美を見出す者は少なかった。枯れ葉などただのゴミでしかないというわけだが、アリマールはそう思わなかった。赤く染まった葉が、風に揺れる様にも趣はあるのだ。

「赤煉瓦を背景にして、燃えるように染まったアシェリアも、それは見事なものだ」

未だ色付く気配も見せない緑のアシエリアを右手に見ながら、アリマールはそう言った。そして、そのころにもう一度、と続けようとして止めたのは、左を歩いていたカリファスが足を止めたからだった。

「カリファスどの……？」

呼びかけてはみたものの、カリファスにはアリマールの声が届いていないようだった。^{まはた}瞬きするのも忘れて、一点を凝視するカリファスの視線を追った先にあるのは、整然と幾つも並べられた石のベンチ、そのひとつだった。

足を止めたカリファスを怪訝そうに見つめるハドウェルとは違って、アリマールにはその理由を想像することができた。

おそらく、このベンチでラリアンヌに遭遇し、同時に、このベンチでラリアンヌが連れ去られたのだろう。そう言えば、語弊があるかもしれない、何といっても連れ去ったのはラリアンヌにとっては兄になるのだから。

しかし、カリファスの心情を思えば、あながち間違いでもないだろう。あの冬の一日を^{いちじつ}最後に、二人は偶然と必然の別なく、一度も互いの姿さえ見てはいないはずだ。

半ば茫然としたまま、新たな一步を踏み出すカリファスを視線で追って、何とかしてはやれないものだろうか、とアリマールは溜息をもらした。

確かに、ラリアンヌにはカリファスとは別の婚約者がいるわけで、許婚者でなくなったカリファスを相手に恋を語らうことは、それを取り決めたサリハールにしてみればおもしろいことではないだろう。だからといって、実の妹に自身の配下の騎士を三人も張り付けて監視させることもないだろう。フェルタ王国に配慮した結果、というよりも、ただの子供じみた嫌がらせでしかない。

ベンチの前で足を止めたカリファスは、そこに何を見ているのだろうか。腰に届きそうなくらいに伸びた、彼の黒く流れるような長い髪を背中で束ねる紫の組み紐は、ラリアンヌが編んだ物だ。そ

れに編み込まれた思いとは、どれほどのものだろうか。アリマールの口から自然ともれる溜息は、見守る視線の先で微動だにしないカリファスの、その身にまとった優美さに対する称賛ではなかった。

王弟殿下、と呼称されるようになって、無官の身であるアリマールは比較的自由に振る舞うことが可能であった。時間を持て余すほど暇ではなかったが、妹の元カリファスの近況を報せてやることを自らの義務と定めて、折を見てはラリアンヌの居間を訪ねていた。あと一月もすれば、一七歳を迎えるラリアンヌは、いつまでも少女のまま留まることを許されず、幼さを残しながらも大人としての魅力も備えつつあった。

ラリアンヌはアリマールの来訪を喜んでくれたが、無粋な監視人たちが快く思っていないことは確かめるまでもないだろう。だが、それを気にしては、彼らの前でカリファスのことを語ることなどできない。もしかしたら、彼らからサリハールに報告が届いているかもしれないが、兄からは今のところ何の咎めもない。

咎め、といえば、サリハールはカリファスを弾劾することを止めた。別の利用価値を見出した結果であるのだろうが、サリハールの思惑は別として、ラリアンヌはそのことを素直に喜んでいた。

たったそれだけで一喜一憂するのだ、と思えば妹が愛おしくもあり、哀れでもあった。

「アリマール兄さま、これを……」

いつもではなかったが、そう言ってラリアンヌは、アリマールに組み紐を差し出す。一年ほど前から始まって、先ほど、七本目を渡された。最初の色は赤、次いで、^{オレンジ}橙、黄、緑、青、藍、と続いて、最後の色が紫だった。虹を構成する七色であるが、虹が天と地をつなぐように自己とカリファスを七色の組み紐でつなぐとしているのかもしれない。

そして、この組み紐を誰に渡してほしい、とも言わなかった。お

そらく、言わないのではなく、言えないのだろう。新たな婚約者エリツツに、というのであれば、サリハールも文句はないだろうが、それがカリファスのためだ、と知れば不快に思っ何を言い出すか知れない。

そこで、ラリアンヌは続けて言うのだった。

「……どなたにお譲りなさっても、構いませんわ」

どうかカリファスさまに、ラリアンヌの青い瞳が、アリマールにそう語りかけていた。

しばらくそうやって、ベンチの前に佇んでいたカリファスだったが、その下で何かを見付けたようで、腰をかがめて拾い上げた。何だろうか、とアリマールが伺い見れば、鳥が落としていった薄茶の羽根のようだった。最低でも午前と午後と、日に二度は掃除のなされる庭で珍しい落し物があるものだ、と空を見上げてても鳥の姿などどこにも見えない。

しかし、拾い上げたカリファスは、いとおしむように見つめて優しく埃を払う。単純に珍品を見付けた、というにしては大袈裟にすぎる。言ってしまったは何だが、たかだか鳥の羽根でしかない。

「カリファスどのは、鳥の羽根でも集める趣味を、お持ちであったか？」

不思議に思っ、アリマールはハドウェルを振り返って問いかけてみた。そうしてみたところで、返ってくる答えは三通りしかない。ハドウェルにとって、アリマールは主の友人ではなく、あくまでも祖国の敵でしかないようで、何年経とうが慣れ合う気は毛頭ないようだった。

案の定、ハドウェルの答えは簡潔な一言に終わった。

「わかりません」

これまで、アリマールがハドウェルに問いかけて得た答えの、三番目に聞いたものである。一番目が、はい、であり二番目が、いい

え、である。この三つで、大概の会話は成立する。それ以外に話す声を聞いたことがない、というわけではないが、カリファスと会話する台詞はアリマールに向けられたものではなく、数の内には入らないだろう。あとひとつ、沈黙も同様である。

四番目の選択肢を選ばなかっただけでもありがたいと思うべきか、アリマールは「そうか」と短く応じて、さらにカリファスの行動を見守った。自身が観察されていることに、気が付かないはずもないだろうが、カリファスは拾った羽根を、そのままポケットにしまい込んでしまったのだ。

もし、アリマールがあのだの冬の日、ラリアンヌがカリファスに残していった詩集の存在を知っていれば、彼の行為にも納得したところだろう。ラリアンヌが鳥にゆだねた祈りの言葉、羽根はそれを伝えようとしているのだ、と。だが、アリマールはそこまで知らないのだった。

「王弟殿下、そろそろ、戻りませんか？」

立ち上がって、振り返ったカリファスの、そう言った表情がいつになく晴れやかに見えるのは、アリマールの気のせいばかりではなかった。斜めに照り射す午後の陽が、瞬間だけ陰って見えたのも。

その年、西海暦三六〇年も残すところ三カ月余りとなったが、まだすべてが終わったわけではない。

追想（後書き）

今回、いきなり三年ほど飛び越えておりますが、その間の挿話として、「空白の歴史 外伝〈秋風〉」なるものを投稿しております。もしよろしければ、そちらも読んでみてください。よろしく願います。

仮想

歴史に「もしも」は許されない。その埋もれてしまった可能性を惜しむのは、勝者の傲慢であり敗者の未練であるのだろうか。それでも、惜しまずにはいられない過去がある。

しかし、もしもあの時、幾ら悔んでも還ってはいかない、それが歴史であるのだろう。

それはまだ、カリファスが子供のころのことだった。

度重なる環境の変化が、体調に異変をあたえたのだとしても不思議ではないだろう。ストイナ王国領を後にして、マルニアーム王国王都ディエンテに移り住んで一月ひとつきしたところ、カリファスは原因不明の高熱を発して寝付いたことがあった。あるいは、このまま死んでしまうのではないだろうか、と病床に着いたカリファスは子供心に考えたものである。姉は彼に生きることが望んだが、会いにきた弟を追い返すような真似はしないだろう。

しかし、死者の意向は図りがたいが、生者はカリファスに生きることを望んだ。

「死なせてはならぬ。何としても助けよ」

医師を叱咤するエドワルの声が、熱に浮かされるカリファスの耳に微かに届いた。高熱に倒れて五日、一向に快復の兆しをみせないカリファスを、エドワルが純粹に案じたわけではなかった。そのことは、続いた言葉が証明した。

「カリファスにこのまま死なれては、せっかく得た物を、これから得ようとする物を、すべて失うことになる。新たな領土、ストイナの平穏は、この子供にあるのだからうけく」

後世、ストイナ戦役と呼ばれる戦いくさが終結して、まだ半年に満たない。今ここでカリファスが死にでもすれば、ストイナ王国はマルニ

アーム王国の陰謀だとして、エングレンを幽閉先から解放しようとするだろう。それが叶わなくとも、彼らに復讐という大義をあたえてやることにもなりかねない。この復讐というものは、時に麻薬にも似て人を酔わせる魔力を秘めている。再び戦端を開いて、先の見えない戦に突入する必要などない。カリファスさえ生きていれば、ストイナ王国はマルニアーム王国に対して、手も足も出すことはできないのだから。

当時、子供でしかなかったカリファスに、そこまで理解することはできなかった。ただ、自分は生きていればいいだけの存在なのだろうか、と少年は薄く目を開けた。虚ろな視線の先に見えたのは、シスタリアの優しい微笑みだった。大丈夫ですよ、つぶやいてシスタリアはカリファスの額に手を当ててくれた。火照った顔にその手は冷たく心地よくもあり、さらなる眠りに身をゆだねてカリファスは目を閉じた。

そうやって、シスタリアがずっと傍らに着いていてくれたことをカリファスが知ったのは、ずいぶんと後になってからことだった。そのことがすでに自我を確立させていたサリハールに、不満をあたえる結果となったのだとして、これは彼自身でさえ気が付いていないだろう。母親の関心が他に移ってしまったのではないか、という不安を埋めるためにカリファスを憎悪するしかなかったのだ、といまさらサリハールが認めることはないだろう。また、カリファスが知り得る範疇のことでもない。

そして、シスタリアがどのような思いで、カリファスを看病したか、これもまた他者の図り知るところではないだろう。エドワルとの間に授かった三人の子が、運命の気紛れに翻弄される様を見たくなかった、たったそれだけの理由であり、それで充分であったはずだ。それに別の感情が加わるのだとしたら、何がきっかけであったのだろうか。

それは、カリファスでさえ記憶に留めない、一夜の彼の発した一言であったかもしれない。朦朧とする意識が、少年に幻覚を見せた

のだろう。さまよう視線をシスタリアに向けて、カリファスはささやいた。

「……はうえ？」

シスタリアを見間違えただけなのとしても、母と姉を亡くし、残った唯一の肉親である父王とは引き離され、ひとりの従者だけを頼りとして異国の地で暮らす少年の、心細さを如実に物語る一言ではなかったろうか。気丈に振る舞う少年の、内面に抱く畏れおそを垣間見た瞬間であった。

カリファスが覚えているのは、迎えにきた母の手から、現世うつしよへと引き戻してくれたのがシスタリアであったということだろうか。その腕かひなに抱かれて、長くなり始めた黒髪をなでてもらった、あの安らぎにも似た優しい温もりだけは鮮明に覚えていた。カリファスの熱が引いたのは、その翌日のことだった。

それから時は移ろって、少年は若者へと成長した。

発言者の意図が理解できなかった。ただ、自分がマルニアーム王国にとっての手駒でしかないのだ、ということだけは理解できた。それだけは、過去も現在も、そして、未来までも変わることはない。そうであるならば、子供でしかなかったあの折に、迎えにきた母の手を離さずにいればよかったのだろうか、と思うのは、カリファスの僻みひがでしかないのだろうか。

西海暦三六〇年も一ヶ月を残すだけとなった、冬の午後だった。マルニアーム王国王都ディエンテ、狹隘な盆地のほぼ中央にある王宮、そこにあたえられたカリファスの居間である。長く斜めに射し込む陽光が窓辺を温め、暖炉では負けじとばかりに炎が爆ぜる。その音だけが、静まり返った室内に響く。

ここ数年で変化したことといえば、新たに円卓と肘掛け椅子が二脚増えたことだった。それにともなって、それまで部屋の中央を占めていた長椅子は、暖炉の前へと場所を移した。それでも、シスタ

リアは長椅子で、カリファスを横に座らせる習慣を改めたりはしなかった。今も、そうやって、シスタリアは確固たる意思を示して、カリファスの青い瞳を覗き込んでくる。

問いかけるかのように、あるいは、試してでもいるかのように、シスタリアはカリファスを見つめて言葉を紡いでいく。

「サリハールは、やりすぎたのです。ストイナの憤懣^{ふんまん}は、日に日に強まる一方です」

商都ルギアニの利権の放棄と自治権の返上、マルニアーム王国から突き付けられたこの二点の要求を、旧ストイナ王国の自治政権は毅然と拒否した。賠償金だとか安全保障税だとか、あるいは、講和金だとか、色々と御託を並べては要求される金銭の支払いを、自治政権側は一度として断ったこともなければ、滞ったこともない。

戸籍ばかりでなく、港の数に国内の街道、城塞の場所、果ては町から村まですべてを記した絵図までも隠すことなく、敗者は勝者に差し出している。四年に渡ったストイナ戦役で活躍した將軍たちが、焼け落ちた王城の跡地で極刑に処されることにも目をつぶってきた。王は幽閉され、王子は連れ去れ、后と姫は自裁した。

そうした上で、ストイナ王国はかろうじて自治の承認を先王エドワルから得たのだ。これ以上の理不尽を受け入れる必要を認めることができなかったことは当然であったかもしれない。

しかし、満場一致で拒絶されたサリハールは、ストイナ王家の「王統譜」の提出を要求した。おそらく、大陸で最も古い血統を受け継ぐだろう王家は、それこそ、神話の時代にまで遡る、偉大なる神々の血筋だともいわれている。ストイナ王国が事実上過去の産物となっても、駐留するマルニアーム王国軍を追い出して、新たに王として君臨しようとする者が現れないのは、その血統を支持し信奉することが、ストイナの矜持に他ならなかったからだ。

そして、「王統譜」は彼らの矜持を具現化した物に等しかった。王家の誕生以来、一度として絶えることなく脈々と受け継がれてきた血統であり、系譜である。他国には決して存在しない、それは彼

らの「歴史」であり、彼らがこの地に君臨していたことの「証明」であった。いささか大袈裟にすぎるかもしれないが、文化と文明を育んできた者たちにとっては、精神の内側までも蹂躪じゅうりゃんされたようにも感じただろうか。

そして、肝心の「王統譜」であるが、その所在を明かす義務の必要を認めなかったのだろう、「王統譜」は城と共に王妃が持っていた、とストイナから回答がなされた。だから、渡すことは叶わない、というのだが、それが虚偽であることは明白である。

しかし、ストイナの強弁に対して、反論する手段をサリハールは見付けられなかった。頑ななまでに主張を繰り返されては、黙るよりなかったのだろう。そして、そのまま興味を失ってしまった。それを手に入れた者がストイナの王だ、とされたのはもうずいぶんと昔の話である。

「……それだけではありません」

シスタリアの話は続いていた。怒りのためか、わずかに声を震わせて彼女はカリファスに語りかけてくる。その一語一語を聞きながら、カリファスは思わずにはいられなかった。だからどうしようというのだろうか、どうしろというのだろうか、と。そうした、カリファスの思いに気が付いているのかいないのか、シスタリアは同席する二人の人物に視線を移した。長椅子の背後で沈黙を守る両者に何かを確認するようにうなずくと、シスタリアは再び言葉を続けた。

「あなたとラリアンヌの婚約は、先王がお決めたことになったこと。それが、ストイナの民たちを、どれだけ安堵させていたことでしょう」

生前のエドワルは、カリファスのことを「人質」と呼んだことはない。腹の内でも思っていたのか、それをカリファスに知る術はないが、少なくとも、表面的には対等に扱ってくれた。マルニアーム王国の礼儀に適った方針であることはやむを得ないことだとしても、勉強に剣術と将来仇として牙を剥くかもしれない相手に対して、

一通りの教養をあたえてくれた。

そして、自身の娘を差し出して、后にさせると言ったのだ。ただ単純に、古い血統に自身の血筋を混ぜただけであっただけのかもしれない。だが、ラリアンヌはマルニアーム王国の息女であり、これを后とすることは、マルニアーム王家にストイナ王家が乗っ取られるような観がある。それでも、少なくとも、ストイナが誇りとし矜持とする偉大なる血統を残すことはできる。

たったそれだけに救いを求める者たちの、哀れを背負うのはカリファスであつたかもしれない。

しかし、ラリアンヌとの婚約は、サリハールによって一方的に解消されてしまった。その後、ラリアンヌがフェルタ王国の王太子と婚約した、と聞かされては、ストイナが浮足立つのは当然と言えるだろう。

「彼らは、また再び侵攻されるのではないか、と競々（きょうきょう）としてるのです」

そう言って、シスタリアは口を噤んだ。暖炉で爆ぜる炎と、窓を叩く風の音が、静まり返った室内に不協和音を奏でる。暖炉の中で積み重ねていた薪が、一際大きな音を立てて崩れた。カリファスはシスタリアの視線から逃れるようにして、その方向へ顔を逸らす。長椅子の背後に佇む二人の内、アリマールがゆっくりとした口調でシスタリアに問いかけるのを、カリファスは燃え盛る炎を見つめて聞いていた。幼き日に見た炎上する城の姿を、脳裏の片隅に思い出しながら。

「……それで、どうして、カリファスどのを……？」

「アリマール殿下、今のストイナに必要なのは、王の声に他ならない、と王太后陛下は判断なされたのです」

そう答えたのは、もう一人の同席者で、ここマルニアーム王国で宰相の地位にあるルーレントであつた。すでに老年の域に達しているルーレントは、白くなつた長い髪を背中であぐら、広い額には年輪を刻む皺が見える以外には年齢を感じさせない。長身の背筋をまっ

すぐ伸ばし、恰幅もよく威厳さえ漂う佇まいは近寄りがたくもあつたし、未だ衰えることのない翠の眼光は近付く者を容赦なく射抜く鋭さがあつた。そのルーレントをして、御しがたいのがサリハールのようである。だが、それはサリハールの方でも同様に感じているのかもしれない。

多くの者を従え、叱咤するルーレントの低い声音が続いた。

「ストイナをなだめることができるのは、今となっては、カリファス殿下だけであろう、と」

頭上から降ってくる言葉を、カリファスはうつむいて聞き流した。もし、歴史が許していたなら、自分が忠誠を誓ったのはシスタリアに他ならない、後日のことになるが、カリファスを訪ねてルーレントはそう回顧する。あの方は、自分にとって生涯唯一の主君であつたのだ、とシスタリアが女王として即位することのなかつた可能性を惜しんだ。

その、歴史の可能性に埋もれてしまった女王は、穏やかな口調でカリファスに理解できなかった、最初の言葉を繰り返した。

「あなたを、ストイナの地に帰してあげることにはできませんが、ここディエンテで、あなたをストイナの王として即位させましょう」手駒でしかないカリファスの、もっとも有効的な利用方法を思い付いただけなのではないか、そして、それが自身の役割なのだろうか、カリファスは己という存在をこれほどまでに呪わしく思ったことはなかつた。

そうしたカリファスの思いなど、考慮するでもなく歴史の可能性に埋もれた女王は続けた。

「そして、王としてストイナの地に語りかけてほしいのです」

「……」

「マルニアーム王国は、ストイナに対して敵意はないのだ、と」

それでも、サリハールが向けるストイナに対する執着が変わらなければ、態勢に影響するとはカリファスには思えなかつた。あるいは、何か他に算段でもあるのだろうか。

しかし、シスタリアは年が改まった西海暦三六一年一月七日、波乱に満ちた生涯に終止符を打つ。もちろん、カリファスを王として截^たたせることは叶わなかった。新たな可能性の誕生を見ることがなく、歴史は刻まれていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8036x/>

空白の歴史

2011年12月3日23時48分発行